資料４

日本ジオパーク再認定審査現地審査報告書

ジオパーク名: 下仁田ジオパーク
現地審査員: 尾池和夫、渡辺真人、野邉一寛

A.　基本情報

面積	188.27 ㎢
人口	7,661 人
日本ジオパーク認定年	2011 年
前回の審査日程および審査員名	2015 年 11 月８～９日 佃　栄吉、目代邦康、古澤加奈
ウェブサイト（URL を記載）	http://www.shimonita-geopark.jp/
ソーシャルメディア（すべて列記）	Facebook、YouTube

B.　提出書類一覧

１．JGC に提出した書類

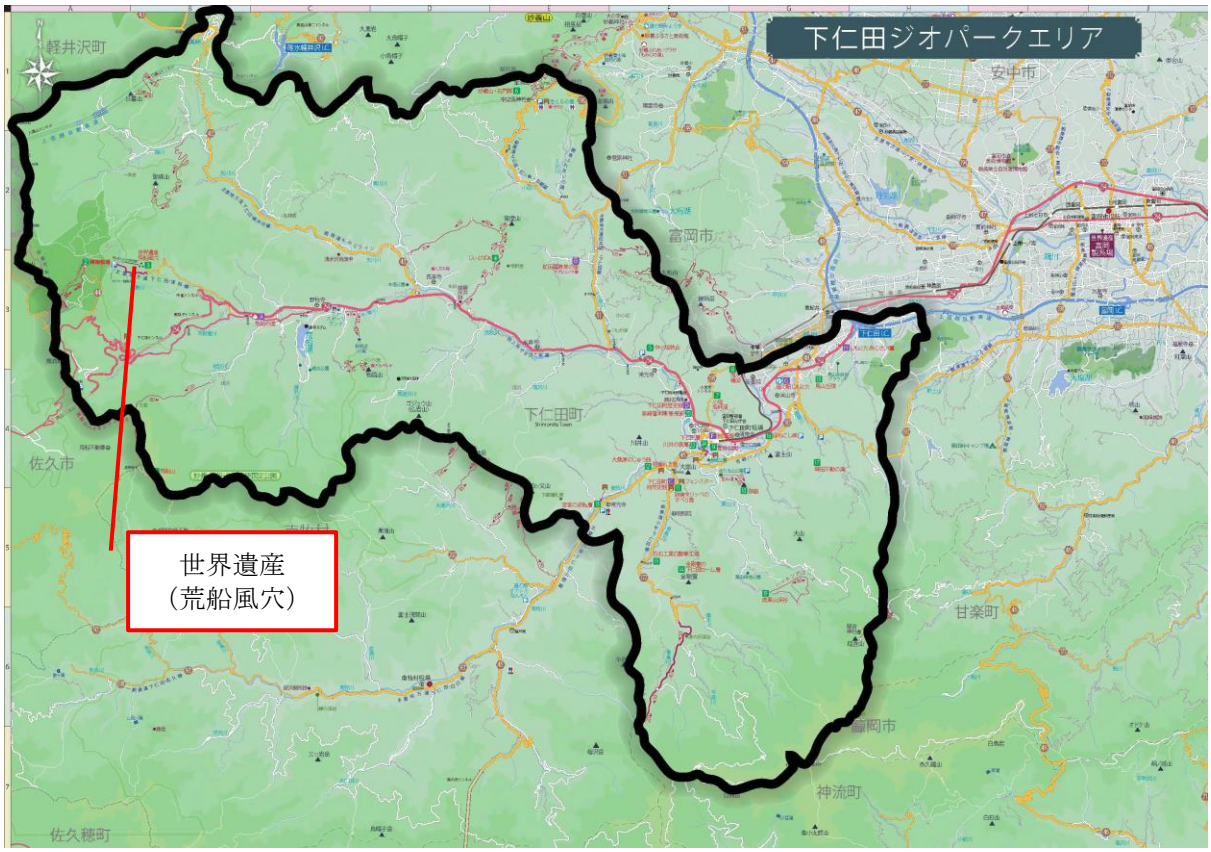
①下仁田ジオパーク現況報告書

２．審査期間中または審査後に直接審査員に提出した書類

①2015 年度再認定審査指摘事項への対応状況
②下仁田ジオパークアクションプラン
③下仁田自然史館基本構想
④ジオパーク下仁田協議会　各部会活動状況
⑤ジオサイトリスト
⑥下仁田ジオパーク学術奨励金交付要綱
⑦教材系列表
⑧下仁田ジオパークブランド制度実施要綱
⑨ジオパークブランド申請者一覧表
⑩下仁田物産ガイド
⑪昭和レトロ下仁田ぐるめぐり
⑫下仁田ジオパークパンフレット
⑬下仁田自然史館パンフレット
⑭下仁田まる分かりガイドブック
⑮下仁田自然史館研究報告書　第 2 号
⑯日本ジオパーク関東大会 in 下仁田　実施報告書
⑰しもにたまち教育旅行案内パンフレット
⑱下仁田町観光パンフレット　しもにた小旅
⑲モデルコースチラシ妙義山、荒船山
⑳モデルコースチラシ　クリッペ散策、奥栗山渓谷
㉑荒船風穴パンフレット
㉒ジオパーク歳時記クリッペ
㉓下仁田自然史館企画展チラシ（アンモナイトの海とマグマの海）
㉔群馬県立自然史博物館企画展チラシ（ぐんまの景観がこんなにも素晴らしい５つの理由）
㉕神津牧場概要

㉖下仁田ジオパークの沿革
㉗日本ジオパーク下仁田応援団定期総会資料（平成 28 年度、平成 29 年度）
㉘ジオパーク下仁田協議会　学術部会、ガイド部会、教育部会、産業観光部会議事録
㉙平成 29 年度下仁田学習の手引き（下仁田町教育委員会）
㉚ジオパーク下仁田協議会　事務局体制

C.　地域の地図



D.　前回の指摘事項に関する取組・改善点

1．組織体制の見直し・ガバナンスのあり方の検討

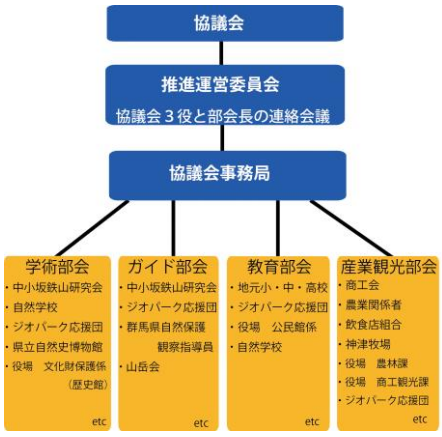
・ジオパークの活動を支える関係各団体の情報共有をはかり、意見交換や関係者全体での意思決定がはかれるよう、事務局が中心となり体制を整えること。

→組織体制は大きく改善した。組織体制の見直しにより、協議会の下部組織として推進運営委員会（協議会役員：会長、副会長２名と４部会長の連絡会）と関係団体から構成される４部会を設置し、

それぞれの役割を明確化している。

また、各部会は３ヶ月に１回程度の部会を開催し、協議会に対して課題解決に向けた提案を行うなどボトムアップの活動が構築された。

実際にこの体制のもとで、部会からの提案を生かして 2016 年度に JGN 関東大会を運営した。



協議会組織体制図

・「下仁田ジオパーク」の事業として行う活動については、活動団体は、他の関係各団体との調整をはかり、より質の高いものになるよう、PDCA サイクルをまわして、継続的に改善をはかっていく必要がある。行政組織内においては、全庁的な取り組みとなることが望ましい。特に学校教育の内容の検討や世界遺産構成資産である荒船風穴の管理などについて、教育委員会と現事務局が連携して進めていくことが重要である。
→2016 年度よりジオパーク下仁田協議会の事務局を教育委員会に移し、教育課長が協議会事務局長を兼務することとなったことから、世界遺産に登録されている「荒船風穴」との連携は図られるようになっている。役場内でのジオパークに関する連携は改善し引き続き観光部局との連携もあるが、全庁的な取り組みにはまだ至っていない。
　下仁田自然史館館長がジオパークの事務局次長となり、ジオパークと自然史館の強い連携が明確に位置付けられた。
・そこでの議論や、予算、決算については、ジオパークとして、地域住民や社会に対して説明責任がある。その情報公開をはかり、開かれた組織づくりをすすめること。
→部会議事録など各種会議の議事録が web で公開されるなど、情報公開は大きく進んでいる。

２．地球科学的遺産（geoheritage）の科学的な評価とその保全策の具体化

・本地域のジオサイトを含むジオヘリテイジについて、多面的な科学的な研究を進め、それらの価値を高めるため、研究活動を積極的にジオパークとして支援すること。
→各ジオサイトの学術的根拠（論文）について整理した。また、学術的研究を推進するために、2017 年度に「下仁田ジオパーク学術奨励金交付制度」を制定し募集を行っている。2017 年度は応募がなかったが、今後幅広く周知を図るとのことである。ジオパークと連携する自然史博物館が 2015 年に「下仁田町自然史館研究報告」を創刊し、地域の研究成果を発表する窓口が整備された。ただ、ジオツーリズムのベースとして必要な、地球のダイナミクスとその中での日本列島の成り立ちに下仁田の地球科学的遺産を位置付けるような整理はまだできていない。そのため魅力的なジオストーリーの構築が難しい状態にある。ジオパークとしての位置付けを行うためには、各サイトに関連する学術成果だけでなく、さらに広く様々な研究をレビューできる広い視野を持った地球科学者との協力が必要である。
・科学的価値と現状の利用の現況を理解した上で、それぞれの現状にあった保全の方策を検討し、保全計画を立案すること。
→下仁田ジオパークを運営するためのアクションプラン（2017 年度～2021 年度版）において保全・保護体制の強化について明記し、保全計画を策定するためのジオサイトカルテを作成することとし、使用頻度の高い 8 地域についてジオカルテを作成した。具体的な保全計画については、今後重要度の高いものから作成することとしている。
　また、下仁田町の条例で毎月 20 日を「ジオの日」と制定し、ジオサイトの清掃活動を行っている。

３．質の高いジオツーリズムを実施するための基盤整備と体制づくり

・本地域におけるジオツーリズムをより質の高いものにするため、継続的にトレーニングを行いガイドのスキルアップをはかること。また、関係団体との連携を図り、それぞれの利点を活かしてジオツーリズム開発をすすめる基盤を整備すること。そして、他地域のジオツアーの取り組みを研究し、本地域のジオツアー実施の仕組みを整えること。
→ジオパーク下仁田協議会では、2016 年度より認定ガイド制度に取り組んでおり、現在 8 名が認定ガイドになっている。また。自然史館との連携によってガイドのスキルアップにも取り組んでいるが、認定ガイドの基準が曖昧であるため、今後、認定ガイド制度の要綱の作成が求められる。

４．学校教育におけるジオパークに関わる教育内容の検討

・地学的な内容だけではなく、自然環境の保全や防災などの持続可能な開発というジ

オパークの考え方に基づいた教育内容を検討すること。
→学校のカリキュラムの中で，下仁田ジオパークにおける地質だけではなく、自然、文化、無形遺産などについて、ジオパークの地域資源を活用した学校教育プログラム（下仁田学習の手引き）が体系的に構築され実施されている。学校で環境教育を行い、その一環として清掃活動を行なっている。

５．地域産品のジオパークブランドの使用についての制度検討と改善
・ジオパークの名前を冠した商品の認証・認定には、ジオパークブランドが損なわれないよう、下仁田ジオパークとして、一定の基準を設ける等、その仕組みについて検討すること。
→2016 年度に「下仁田ジオパークブランド制度」を構築し、質の高い商品開発や既存承認の付加価値向上に取り組んでおり、現在、19 品目が認定されている。

６．各ジオサイトの管理体制の整備
・それぞれのジオサイトの現状にあった管理体制を確立すること。
→世界文化遺産荒船風穴については管理計画がある。他ジオサイトの具体的な保全計画については、今後重要度の高いものから作成することとしており、現在、8 箇所のジオサイトについてジオサイトカルテを作成した。

７．地域の防災、減災活動でのジオパークの活用
・この地域で起こりうる自然災害について、地球科学的知見に基づいて検討し、地域住民の減災に役立つよう、ジオサイト・ジオストーリーを活用した取り組みを行うこと。
→地すべりの見学会や防災講演会を行なった。自然史館では、JGN より提供された糸魚川大火や伊豆大島での土砂災害状況などを伝えるパネルを活用して、来館者に防災への周知を行っている。

８．ジオサイトの多面的な評価と魅力あるジオストーリーの構築
・地域の資源を、科学的にそしてより魅力的に見せるために、そのつながりを説明するジオストーリーの一層の構築が必要である。そのための調査・研究活動をすすめること。
→専門性の高いツアーと町歩き的なツアーを併せ持ったツアー開発に取り組むなど地域の各種資源の間の繋がりを意識したストーリー作りの試みが行われている。拠点施設も含めて、自然・文化遺産の説明の多くが下仁田ジオパーク内と近隣地域内の物やことの説明のみになりがちで、地域資源の価値や意味がわかりにくくなっている。
　広い視野の科学的検討に基づき、日本列島の成り立ちや，地球のダイナミックな活動と下仁田で見られるもののつながりが分かるようなガイドが必要である。

E.　ユネスコ世界ジオパーク運営指針基準の検証

E.1　領域

E.1.1 地形地質遺産および保全

当該地域は群馬県の西南部に位置し東西約 18km、南北約 10km の総面積 188.27 ㎢の下仁田町全域をジオパークの範囲としている。ジオサイトの主なものとしては、中央構造線にそって九州までつづいている三波川変成岩類といわゆる秩父帯に属する付加帯や日本の地質百選にも選定されている跡倉クリッペを代表とする「根なし山群」、中央構造線の活動経過を解明するカギと言われている大北野－岩山断層や本宿コールドロンなど、多くの地質現象が十数キロメートル以内に密集して存在している。

また、日本三大奇勝の一つにも選ばれている妙義山や荒船山などは、地質に関する知識がない一般の方でも地形・地質の不思議を体験できる登山・ハイキングコースとなっている。

なお、文化サイトである「荒船風穴」は世界文化遺産に登録されている。

特に重要な地形地質サイト：跡倉クリッペ

ジオパークの運営計画である下仁田ジオパークアクションプラン（2017 年度～2021 年度版）に保全・保護体制の強化に伴う保全計画書の作成、ジオサイトの見直しによる地域資源のデータベース化、ジオサイトカルテの作成などについて記述されており、その取り組みも計画的に進められている。跡倉クリッペの地質学的価値に関しては、跡倉クリッペそのものに関する研究だけでなく、日本列島の地質構造発達史に関する研究も含めた最近の研究に基づいて再度検討と整理を行う必要がある。

また、下仁田町の条例で毎月 20 日を「ジオの日」と制定し、日本ジオパーク下仁田応援団を主体とした地元業者や商工会などの各種団体によるジオサイトの清掃活動が行われている。

指摘事項　(有)・無

指摘事項：地域住民からの提案による「ジオの日」が制定されており、毎月、地域住民によるジオサイトの清掃活動が行われている。全国的にも先進的な取り組みであり、日本ジオパークネットワーク内での情報共有を期待する。

跡倉クリッペの地質学的価値に関しては、跡倉クリッペそのものに関する研究だけでなく、日本列島の地質構造発達史に関する研究も整理した上で、跡倉クリッペと日本列島の成り立ちの関係に関して再度検討と整理を行う必要がある。

E.1.2 境界線

日本ジオパーク申請書も含め、協議会が発行しているリーフレット、マップ、看板等にジオパークの範囲が明確に示されていないため、下仁田町の外から来る人はどこまでが下仁田町か知らないので、どこまでがジオパークかわからない。

指摘事項　(有)・無

指摘事項：地域住民及び来訪者に対してジオパークの範囲を明確に示す必要があるため、日本ジオパークの申請書も含め協議会が発行するリーフレット、マップ、看板等にジオパークの範囲を表示することが求められる。下仁田町の外から来る人はどこまでが下仁田町か知らないので、どこまでがジオパークかわからない。

E.1.3 可視性（ビジビリティ）

・ジオパークの可視化について

ジオパーク下仁田協議会では、ジオパークの可視化を目的として、当該地域への入り口である上越自動車道のインター出口や上信電鉄高崎駅など関係施設に看板やのぼり旗を設置するとともに、マップ、ツアーチラシなどを配布している。また、HP、Facebook、YouTube などによる情報発信も行われているが、解説看板にはジオパークのロゴマークのみ掲載しており、下仁田ジオパーク、あるいはジオパーク下仁田協議会の名称が表示されていないため、ジオパークとしての可視化が統一されたものとはなっていない。

下仁田 I.C 出口の誘導看板

上信電鉄高崎駅ののぼり旗

ジオサイト看板

・拠点施設での展示

ジオパークの拠点施設である下仁田自然館入り口部には下駄箱を利用した日本ジオパークコーナーを設けており、各ジオパークのリーフレット、マップ、岩石などが展示されている。

ただ、日本ジオパーク全体としての取り組みが分かるような全体地図の掲示などの工夫が必要である。

下駄箱を利用した各地域の
パンフレット置き場

・多言語対応

パンフレットについては日・英・中・韓の 4 カ国語対応、HP については英語対応となっているが、看板およびガイドについては外国語対応となっていない。

指摘事項　(有)・無

指摘事項：看板、チラシなどにジオパークないし協議会の名称を表示し、下仁田ジオパークとして統一した可視化が必要である。また、外国人の受け入れを考えるならば、世界遺産に登録されている「荒船風穴」は当然のことながら、それだけでなくジオパークの解説看板の外国語対応が必要である。

E.1.4 施設・インフラ整備

ジオパークの情報やサービスを提供する施設、運営団体は協議会の部会員としてジオパークの運営に参画しており、協力関係を築いている。特に、ジオパークの拠点施設である「下仁田自然史館」や関連施設である「下仁田歴史館」「道の駅しもにた」とは一体となった情報発信に努めている。

なお、「下仁田自然史館」は博物館登録を目指し、展示内容や人員の強化を行っている。

また、JR 高崎駅と下仁田駅を結ぶ鉄道を運営する上信電鉄（株）は、ジオパークのラッピングトレインを運行するとともに、電車内においてジオパークの掲示を行い情報発信に取り組んでいる。ただし、掲示の内容は一般の人が気楽に楽しめるものではなかった。

下仁田ジオパークトレイン

電車内での掲示

指摘事項　(有)・無

指摘事項：他のジオパークにおいて、ラッピングトレイン、ラッピングバスの事例はあるが、電車内での情報発信についてはあまり例がないため、JGN 内での情報共有を図ってもらいたい。ただ、説明内容については、駅の近くで見られるジオサイトの紹介など、電車で来る観光客のニーズに合わせた工夫が必要である。

また、計画的な施設・インフラ整備を行う必要があることから、総合案内看板、誘導看板、ジオサイトの解説看板の設置も含めた全体計画図と工程表の作成が必要である。

E.1.5 情報、教育、研究

・看板、パンフレット、リーフレットについて

協議会で作成している看板、パンフレット、リーフレットについては分かり易い内容となっている。しかし、その説明はその場所にあるものだけの説明となっており、日本列島の成り立ちおよびダイナミックな地球の活動との関係性が分からない。「日本列島の誕生をひもとく」というキャッチフレーズが使われているのに、日本列島の誕生があまり語られないのは残念である。たとえば、本宿陥没であれば後期中新世以降に東北日本に大きなカルデラが多数できた出来事と関連づけて、日本列島の成り立ち、あるいはプレートの沈み込み帯では何が起こるか、という観点で語ってほしい。跡倉クリッペについては、水平に近い断層を介して全く違う地質体が重なっている場所が日本列島各地にあることを考慮に入れ、「珍しいものがある」かのような解説ではなく、日本列島のように長期間プレートの沈み込み帯にある場所で起こるしばしばおこる現象の一つ、日本列島の土台を作った変動の一つとして語ってほしい。

地元の人にとって「跡倉クリッペ」がとても大切なもので重要な存在であるとしても、その意味をきちんと語らずに「跡倉クリッペ」を強調するだけでは何が面白いのか、何が大切なのか外の人には伝わらない。

・下仁田自然史館の展示について

子供の興味を引く工夫がされた展示があり、ジオパークの拠点として今後も重要な場所である。地質に関する展示はかなり専門的なものが多く、ジオパークが想定していると思われる客層とはかなり異なるターゲットに向けたものとなっている。ジオパークにおける下仁田自然史館の使い方を再度検討し、それに合わせた展示とする必要がある。自然史館関係者による研究成果を展示しているのはとても良いことだが、これも大学、あるいは大学院で地質学を勉強した人でないとわからない内容であった。

・下仁田歴史館の展示について

下仁田の歴史に触れられる重要な場所であり、荒船風穴への導入としても大事な場所である。全体としていきなり細部から見せる展示・解説が多いので、展示されているものどんな意義がありどう面白いのかがわかりにくい。一例を挙げれば、現地審査の際の館の解説において地形を生かして戦った「下仁田戦争」が語られたが、時代背景と戦いの位置付けの説明がほとんどないまま戦争の細部が語られたので、戦争の意義を理解することが難しかった。

・教育プログラムについて
　下仁田ジオパークにおける地質だけではなく、自然、文化、無形遺産などについて、ジオパークの地域資源を活用した学校教育プログラム（下仁田学習の手引き）が体系的に構築され実施されている。
　また、ジオパークを活用した教育旅行の誘致にも積極的に取り組んでいる。
・ジオパークによって行われた科学的研究について
　下仁田自然史館研究報告が下仁田で行われた地質学的研究の発表の場となっている。また、考古学ジャーナルに「糸魚川、下仁田産の石材と人類のかかわり」が発表された。

指摘事項　(有)・無
指摘事項：ジオサイトを日本列島の成り立ちよびダイナミックな地球の活動と関連づけて語ってほしい。下仁田自然史館の展示については、ジオパークとの連携を考慮して展示の内容と見せ方を工夫してほしい。展示施設、紙媒体などに、相手の立場にあまり立っていない情報提供がある。情報提供者にとって常識であっても受け手には常識でないことがたくさんある、という前提に立って情報を提供する、あるいはコミュニケーションするよう心がけると良い。こうしたコミュニケーションは若い人の方が得意であることが多いので、若手の意見を取り入れることが必要である。
　ジオパークの資源を体系的に取り入れた学校教育プログラム（下仁田学習の手引き）は、他ジオパークの参考となるものであることから、JGN での情報共有を期待する。

E.2　その他の遺産

E.2.1: 自然遺産

　ジオサイト、文化サイト、その他のサイトにおいて 6 カ所が妙義荒船佐久高原国定公園に含まれている。日本ジオパーク下仁田応援団には植物の専門家がいて、長年地元の植物や生態系を調査している。

指摘事項　(有)・無
指摘事項：各種自然資源についてリスト化しジオパークとしてどのように活用が可能か再度検討してほしい。特に植物を中心とした生物多様性について、地質地形との関連を明確にした上でジオパークにもっと取り入れると良い。

E.2.2 文化遺産

　文化サイトである荒船風穴が「富岡製糸場と絹産業遺跡群」の構成資産として、2014 年に世界文化遺産に登録されている。現場にはガイドが常駐しており、地形地質と関連づけたわかりやすい説明が行われている。中小坂鉄山については従来から地元住民によるツアーが行われている。各種文化遺産については下仁田歴史館に解説があるが、羅列的な展示と解説であり、改善が必要である。研究成果が次々と出ている旧石器・縄文遺跡については、今後の教育・ツーリズムへの活用が期待される。

指摘事項　(有)・無
指摘事項：重要な価値のある遺跡についリスと化し、保全、博物館での展示、教育・ツーリズムへの活用について計画を作成する必要がある。

E.2.3 無形遺産

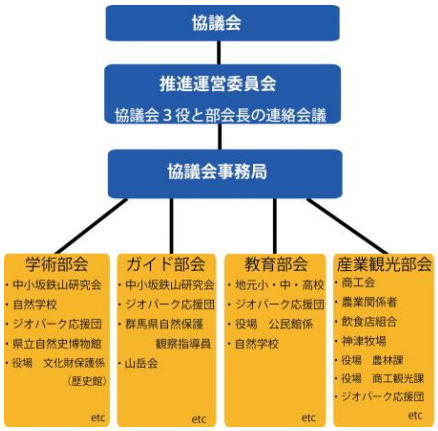
　下仁田歴史館に若干展示があるが、ジオパークと連携して取り扱っていないようである。
指摘事項　(有)・無
指摘事項：地域資源の再調査とリスト化を行い、無形遺産もジオパークの資源として活用することが求められる。

E.2.4 気候変動および自然災害への関わり

国土防災（株）や地質学会との連携による地すべり現場の見学会（主催：地質学会関東支部、後援：ジオパーク下仁田協議会）やジオパーク協議会主催による防災学習会を開催しており、地域住民への防災意識向上の活動が進められている。気候変動については特に解説などはなされていない。

指摘事項　(有)・無
指摘事項：地球規模の気候変動と自然災害の関わりについて説明する工夫が必要である。

E.3　管理運営



協議会組織体制図

ジオパークの運営主体であるジオパーク下仁田協議会には、下仁田町役場をはじめとする商工関係者 18 団体によって構成されており、その下部組織として具体的な事業提案を行う 4 部会が設置されている。全ての部会にジオパークの活動の主体となっている下仁田応援団のメンバーが参加している。

ジオパークの運営計画であるアクションプラン（2017 年度～202 年度版）は各団体および個人間の連携と議論によるボトムアップによって計画が立案されている。

また、協議会運営の窓口を担う事務局は下仁田町教育委員会の教育課にあり事務局長以下 6 名で構成されている。

協議会事務局体制

職　務	氏　名	担　当	雇用形態
事務局長	大河原　順次郎	事務局事務の総括に関すること	兼務：間接雇用
事務局次長	中村　由克	下仁田町自然史館との連携に関すること	兼務：間接雇用
係長	岩井　　実	部会運営に関する事	専任：間接雇用
専門員	関谷　友彦	地質学全般に関する事（学部卒）	専任：間接雇用
事務局員	片山　美雪	情報発信に関する事	専任：間接雇用
事務局員	永井　紀子	会計事務に関する事	専任：間接雇用

ジオパーク関係経費の推移

年　度	施設整備費	人件費・経常費	経費計	備　考
２０１１	16,304,022	14,057,974	30,361,996	日本ジオパーク認定
２０１２	28,194,484	11,151,971	39,346,455	
２０１３	28,642,782	10,875,545	39,518,327	
２０１４	10,822,387	11,628,115	22,450,502	
２０１５	9,527,801	14,617,334	24,145,135	条件付再認定
２０１６	10,545,109	15,142,130	25,687,239	
２０１７	2,069000	17,531,000	19,600,000	再認定審査
計	106,105,585	95,004,069	201,109,654	

指摘事項　(有)・無
指摘事項：協議会の運営費は独自に管理された予算となることが望ましい。

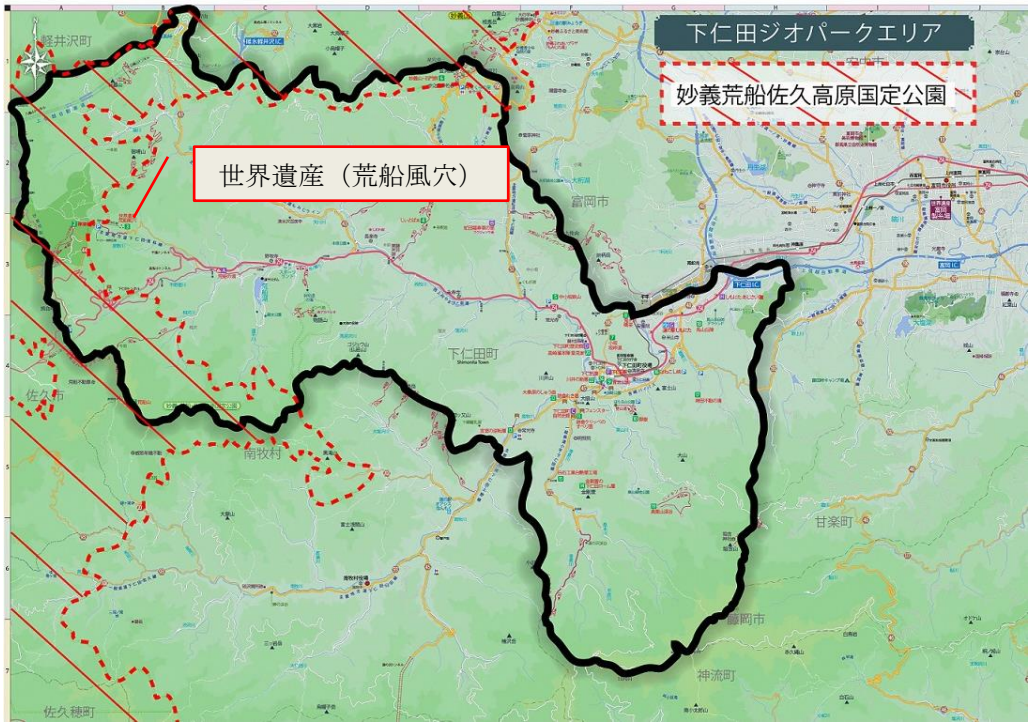
E.4　重複（オーバーラッピング）

ジオサイトである荒船風穴が「富岡製糸場と絹産業遺跡群」の構成資産として、2014 年に世界文化遺産に登録されている。

世界文化遺産である荒船風穴の運営管理とジオパークの運営管理は下仁田町教育委員会教育課で行っており、教育課長がジオパーク下仁田協議会の事務局長を兼務していることから連携した取り組みを行っている。現場では地形地質の解説と荒船風穴の歴史をうまく融合してガイドが説明していた。

また、ジオサイトや文化サイトが国定公園に指定されており、保護されている。

指摘事項　有・(無)
指摘事項：



E.5　教育活動

下仁田ジオパークにおける地質だけではなく、自然、文化、無形遺産などについて、ジオパークの地域資源を活用した学校教育プログラム（下仁田学習の手引き）が体系的に構築され実施されている。また、ジオパークを活用した教育旅行の誘致にも積極的に取り組んでおり、他地域の参考となるものである。教育活動においては、今後 ESD や SDGs の観点を取り入れて行ってほしい。

指摘事項　(有)・無
指摘事項：教育活動においては、今後 ESD や SDGs の観点を取り入れて行ってほしい。

E.6　ジオツーリズム

ジオツーリズムの推進を目的として、観光協会や上信電鉄などとの連携によって「世界遺産・ジオパーク」観光タクシーの運行や教育旅行の誘致など積極的に取り組んでいる。審査の際に体験した、下仁田駅前から出発するまち歩き＋地形地質のツアーはジオパーク・ジオツアーの入り口として機能するものであった。鉱山があったから日本で二番目の私鉄が下仁田まで開通したことなど、地質と人の暮らしの関わりをうまく伝えていた。

ただ、全体としてジオツーリズムの地域経済への貢献は明確ではなく、そのことがジオパーク活動の地域内での広がりがあまり進まない原因の一つである。ジオツーリズムを利用した地域経済の活性化をプロデュースする人材がジオパーク事務局か協議会に必要であろう。

ガイド育成については、認定ガイド制度や下仁田町自然史館との連携によってスキルアップ講座が開催されている。ガイドの解説を聞く限り、目の前にあるものが何かを説明することからあまり広がっておらず、そこから日本列島の誕生や地球の仕組みに広げて説明できるような講座がなされていないようである。

ガイド養成講座の内容を見直し、下仁田ジオパークと日本列島の成り立ちや地球の仕組みとのかかわりが伝わるような、さらに下仁田ジオパークのテーマである「日本列島の誕生をひも解く根無し山」に基づいたストーリーでの解説が必要である。また、植物を中心とする生物などの地域資源も取り入れ、それぞれのサイトにおいても、「大地の成り立ち」「生態系」「人の営み」の関係性がひも解けるような工夫が必要である。

指摘事項　(有)・無
指摘事項：ジオツーリズムによる地域経済の活性化をプロデュースできる人材をジオパーク活動に引き込んでほしい。下仁田で見えるものから日本列島の成り立ちや地球のダイナミックな活動を語れるようなガイドが育つ養成講座を実行してほしい。

E.7　持続可能な開発

E.7.1 持続可能な開発に関する方針

ジオパークの運営計画であるアクションプラン（2017 年度～2021 年度版）において、ジオパークによる地域活性化に向けての総合的な計画が策定された。策定にあたっては日本ジオパーク下仁田応援団のメンバーも部会員として参加し、ボトムアップ的な議論がなされた。ただし、具体的な数値目標や年度毎の達成目標値が設定されておらず、今のままでは実効性にやや疑問がある。また、アクションプランに SDGs の観点を盛り込む必要がある。

指摘事項　(有)・無
指摘事項：運営計画については協議会でのさらなる議論を重ね、具体的な数値目標を設定するとともに、「いつ、誰が、何をするのか」までの詳細な計画を策定することが必要である。その際に SDGs の観点を盛り込んで持続可能な開発に向かったアクションプランとしてほしい。

E.7.2 パートナーシップ

ジオパークの運営主体であるジオパーク下仁田協議会には、下仁田町役場をはじめとする商工関係者 18 団体によって構成されている。また、その下部組織として具体的な事業提案を行う 4 部会が設置されており、各団体および個人間の連携によって運営されている。

ジオパーク活動に取り組むメリットを理解し、実際にジオパーク活動に参画する意思のある団体を協議会メンバーとすべきであり、今後、協議会規約に基づいた協定等を締結する必要がある。

指摘事項　(有)・無
指摘事項：協議会会員に対して、協議会規約に基づいた参画依頼および承諾書を交わすことが求められる。

E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

ジオパークの運営を主体的に支えている「日本ジオパーク下仁田応援団」（2014 設立）は様々な地域住民（134 名）によって構成されており、協議会の部会を通じてジオパークの運営計画や活動に積極的に参加している。応援団の提案によって下仁田町の条例として毎月 20 日が「ジオの日」と制定され、毎月 20 日にジオサイトの清掃活動が行われている。清掃活動については、徐々にではあるが他の住民へも浸透している。なお、下仁田応援団はその活動実態にふさわしい名前に改称を検討中である。

指摘事項　有・(無)
指摘事項：

E.8　ネットワーク活動

協議会事務局員や部会員、ガイドが日本ジオパークネットワークの全国大会や全国研修会などに参加し下仁田ジオパークの PR を行うとともに意見交換による情報の共有に努め、平成 28 年度には日本ジオパーク関東大会 in 下仁田を開催し、JGN のレベルアップにも貢献している。

なお、下仁田ジオパークの活動の主体となっている「日本ジオパーク下仁田応援団」は近隣のジオパークへの視察研修を毎年行っており、ガイドとの意見交換を通じた交流事業を行っている。

また、日本地質学会、地学団体研究会、日本地学教育学会、日本第四紀学会、日本考古学協会などにおける発表によってジオパークの普及に貢献している。

指摘事項　有・(無)
指摘事項：

E.9　地質鉱物資源の販売

地質鉱物資源の取引にジオパークは関与していない。

指摘事項　有・(無)
指摘事項：

E.10 防災・安全対策、防災教育、災害対応

国土防災（株）や地質学会との連携による地すべり現場の見学会（主催：地質学会関東支部、後援：ジオパーク下仁田協議会）やジオパーク協議会主催による防災学習会を開催しており、地域住民への防災意識向上の活動が進められている。

指摘事項　有・(無)

指摘事項：

F.　総括

下仁田ジオパークは、平成 23 年 9 月に日本ジオパークに認定され活動を行ってきたが、平成 27 年 11 月に実施された再認定審査において、ジオパーク活動の根本ともいえる、地域の自然資源の評価とその保全方法の検討や、下仁田ジオパークのステークホルダーとの関係性の構築、ガバナンスのあり方、さらにはこの地域の目指す方向の検討など、活動の根幹に関わる部分について組織体として主体的に議論を積み上げていない現状によって、推進体制の再構築を条件に 2 年間の条件付再認定となった。

今回の現地審査では、ジオパークの運営を行うジオパーク下仁田協議会の組織体制の構築と地域住民の意見を取り入れたボトムアップの活動になっているかについて重点的に審査を行った。

組織体制の改善によりガバナンスが以前より明確になり、ジオパークと下仁田自然史館（旧下仁田自然学校）との連携体制もより明確となるとともに、地域住民が参加するボトムアップ的な運営が行われ始めている。また、運営計画も策定され、地質遺産の再評価と保全方法の検討も行われた。ただし、ジオパークを運営する協議会の組織体制や事務局体制のさらなる強化、運営計画の目標の明確化が求められる。また、跡倉クリッペなど地域の地質遺産の地球科学的意義を広い視野をもってさらに整理し、それをわかりやすいストーリーに仕立てることも急務である。一方的な情報発信でなく観光客の立場に立った情報提供や、下仁田ジオパークの様々な良い活動の積極的な共有など、下仁田ジオパークの外側の人とのコミュニケーションを改善して行く必要がある。

全体としては課題とされた項目について多くの改善がみられ、ボトムアップ型の推進体制が図られており、ジオパークとして再出発する体制が整ったと判断し、日本ジオパークとして再認定する。多くの指摘事項を列挙したが、事務局で問題を抱え込まず、役場内やジオパーク内外の様々な専門家の協力を得て課題を解決して行ってほしい。

G.　指摘事項

・提案：グリーンカード

・主な指摘事項

１．地形地質遺産および保全について

現在、保全計画の策定に向けてジオサイトの見直しとジオサイトカルテの作成に取り組んでおり、ジオパークの運営計画であるアクションプラン（2017 年度～2021 年度版）にも保全・保護体制の強化について記載されている。今後は具体的な数値目標を設定し取り組むことが望まれる。

また、地域住民からの提案によって、下仁田町の条例で毎月 20 日を「ジオの日」と制定し、日本ジオパーク下仁田応援団を主体とした地元業者や商工会などの各種団体による清掃活動が行われている。他ジオパークの参考となるので、JGN での情報共有を期待する。

跡倉クリッペの地質学的価値に関しては、跡倉クリッペそのものに関する研究だけでなく、日本列島の地質構造発達史に関する研究も整理した上で、跡倉クリッペと日本列島の成り立ちの関係に関して再度検討と整理を行う必要がある。

２．境界線について

日本ジオパークへの申請書も含め、協議会が発行しているリーフレット、マップ、看板等にジオパークの範囲が明確に示されていないため、日本ジオパークの申請書の修正も含めジオパークの範囲を明確に示す必要がある。下仁田町の外から来る人はどこまでが下仁田町か知らないので、どこまでがジオパークかわからない。

３．可視性について

協議会が発行するマップ、リーフレット、看板等に協議会ないしジオパークの名称

を表示し、統一的な可視化が求められる。

４．施設・インフラ整備について

車内の掲示については、駅の近くで見られるジオサイトの紹介など、電車で来る観光客のニーズに合わせた工夫が必要である。

ジオツーリズムの戦略を検討する上でも、計画的な施設・インフラ整備を行う必要があることから、総合案内看板、誘導看板、ジオサイトの解説看板の設置も含めた全体計画図と工程表の作成が必要である。

５．情報、教育、研究について

ジオサイトを日本列島のなりたちおよびダイナミックな地球の活動と関連づけて語ってほしい。下仁田自然史館の展示については、ジオパークとの連携を考慮して展示の内容と見せ方を工夫してほしい。展示施設、紙媒体などに、相手の立場にあまり立っていない情報提供がある。下仁田の人にとって、あるいは情報提供者にとって常識であっても受け手には常識でないことがたくさんある、という前提に立って情報を提供する、あるいはコミュニケーションするよう心がけると良い。こうしたコミュニケーションは若い人の方が得意であることが多いので、若手の意見を取り入れることが必要である。

ジオパークの資源を体系的に取り入れた学校教育プログラム（下仁田学習の手引き）は、他ジオパークの参考となるものである。JGN での情報共有を期待する。なお、教育プログラムには ESD, SDGs の観点を盛り込む必要がある。

６．自然遺産について

各種自然資源についてジオパークとしてどのように活用が可能か再度検討してほしい。特に植物を中心とした生物多様性について、地質地形との関連を明確にした上でジオパークでもっと取り上げると良い。

７．文化遺産について

重要な価値のある遺跡について、保全、博物館での展示、教育・ツーリズムへの活用について計画を作成する必要がある。

８．無形遺産について

地域資源の再調査を行い、無形遺産もジオパークの資源として活用することが求められる。

９．管理運営について

組織体制の再構築によってボトムアップの活動となった。下仁田ジオパークの運営指針であるアクションプラン（2017 年度～20121 年度）の内容は概要的なものにとどまっており、具体的な数値目標や年度毎の達成目標値を設定するとともに、「いつ、誰が、何をするのか」までの詳細な計画を策定することが必要である。また、アクションプランに SDGs の観点を盛り込む必要がある。

10．ジオツーリズムについて

ジオツーリズムによる地域経済の活性化をプロデュースできる人材をジオパーク活動にもっと引き込んでほしい。下仁田で見えるものから日本列島の成り立ちや地球のダイナミックな活動を語れるようなガイドが育つ養成講座を実行してほしい。下仁田ジオパークの地質と日本列島のなりたち、ダイナミックな地球の活動とのかかわりを取り入れた、わかりやすく面白いストーリーでの解説が必要である。また、植物を中心とする生物などの地域資源も取り入れ、それぞれのサイトにおいても、「大地の成り立ち」「生態系」「人の営み」の関係性がひも解けるような工夫が必要である。

11．パートナーシップについて

ジオパーク下仁田協議会には様々な関係団体が参画しているが、書面による協定等が締結されていないため、協議会規約に基づいた参画依頼および参画承諾書を交わすことが求められる。

12. ネットワーク活動について

JGN 全国大会や全国研修会に積極的に参加するとともに、近隣ジオパークとの交流事業も行っている。また、日本地質学会などの関係団体におけるジオパークの発表など JGN 活動の認知度向上にも貢献している。

今後は、JGN 内において当ジオパークの活動実績を共有するとともに、「他ユネスコプログラムとジオパークの連携」や「学校教育におけるジオパークの活用」などの新たなワーキンググループの先導役としてネットワークへの貢献を期待したい。

H.　行程表

現地審査視察内容・場所	主な対応者	気づいたこと／コメント
1 日目 (平成 29 年 11 月 14 日)		
1．概要説明、事務局ヒアリング 	原　秀男 （下仁田町長） 吉弘　拓生 （下仁田副町長） 茂木　学 （下仁田町教育長） 大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） 岩井　実 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ推進係長） 関谷　友彦 （協議会事務局員・専門員） 片山　美雪 （協議会事務局員） その他参加者名簿参照	・2015 年の条件付再認定の結果を受けて、組織体制の再構築を行いボトムアップの運営体制となっている。 ・日本ジオパーク下仁田応援団を中心として、地域住民にジオパーク活動の必要性が浸透しつつある。
2．首長ヒアリング 	原　秀男 （下仁田町長） 吉弘　拓生 （下仁田副町長） 茂木　学 （下仁田町教育長） 大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） 岩井　実 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ推進係長） 関谷　友彦 （協議会事務局員・専門員） 片山　美雪 （協議会事務局員）	・ジオパーク下仁田協議会の会長である原　秀男下仁田町長は、2016 年の選挙によって当選された。当初、ジオパーク活動に対する認識が低かったが、ジオパーク活動に関わるにともない、下仁田町にとってジオパーク活動が重要であるという認識に変わってきたとのことであった。 ・吉弘副町長および茂木教育長においても、ジオパーク活動は重要であるとの認識であった。

３．ジオツアー 	高橋　真理子 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ応援団・ジオガイド） 森川　美恵子 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ応援団・ジオガイド） 神戸　百合子 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ応援団・ジオガイド） 黒澤　雅文 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ応援団・ジオガイド） その他参加者名簿参照	・まち歩きと地形地質の話題を融合した分かりやすい内容での解説であったが、下仁田ジオパークのことだけではなく、日本・世界のジオパークで何が楽しめるかについても触れて欲しい。 ・ジオサイトにおいてその場所の説明だけではなく、日本列島や地球のダイナミックな活動につなげて説明してもらいたい。 ・看板についても、その場所の説明だけではなく、日本列島や地球とのかかわりが分かり易い内容としてもらいたい。 ・説明看板の設置位置が動線から外れているものがあった。 ・下仁田層のジオサイトには解説看板が必要である。
４．拠点施設見学 （下仁田歴史館） 	秋池　武 （歴史館館長） 高瀬　茂 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ応援団・ジオガイド） その他参加者名簿参照	・ジオパークとしてのストーリー性を持たせるためには、荒船風穴を含めた文化的資源の解説に地形・地質との関わりをわかりやすく盛り込んだパネルなどが必要である。下仁田戦争と地形の関わりの話は面白かったが、時代背景などの前置きがあるともっと良かった。
５．ジオツアー （荒船風穴） 	堀口　和利 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ応援団・風穴ガイド） 秋池　武 （歴史館館長）	・世界遺産であることからも、解説看板も含めた外国語対応が必要である。 ・風穴の地質地形的背景はおおむね分かり易く説明されていたが、平面図だけではなく断面図なども掲示した方がよりわかりやすい。 ・一般の観光客は駐車場から現地まで約 800m を徒歩で往復しなければならないため、途中の案内や駐車場の位置について再検討する必要がある。
６．連携企業視察 （神津牧場） 	須山　哲男 （神津牧場長）	・工場長による牧場の位置と地形との関係についての説明がなければジオパークとしての位置付けが不明瞭であるため、関係性を示した看板の設置が必要である。

2 日目 (年月日)		
1．ジオサイト見学 	大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） 岩井　実 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ推進係長） 関谷　友彦 （協議会事務局員）	・総合案内看板だけではなく、妙義山がどのようにして形成されたのかについての解説看板が必要である。 ・下仁田ジオパークのロゴマークは表示されているが、協議会ではなく下仁田自然史館が設置した看板であるかのように表示されているためジオパークとしての統一感が感じられない。
2．関係者ヒアリング 	茂木　学 （下仁田町教育長） 高坂　和之 （下仁田高等学校長） 見友　勝久 （下仁田中学校教頭） 小河原　修 （下仁田小学校長） 新宮　義男 （商工会事務局長） 高橋　幸彦 （富岡行政県税事務所） 松本　秀信 （下仁田町観光協会） 小島　博 （上信電鉄部長） その他参加者名簿参照	・小中高校の連携によって、学校教育にジオパークの資源が体系的に取り入れられている。 ・上信電鉄を含めた民間企業もジオパークと連携した取り組みを行っている。 ・住民の組織である日本ジオパーク下仁田応援団がジオパークの主体となって活動を行っており、部会メンバーとして協議会の意思決定にも関わっている。
3．昼　食 		・ジオ定食を提供している食堂では、ジオパークとしてのストーリーカードを設置しているとのことであった。
4．誘導看板 	大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） 岩井　実 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ推進係長）	・高速道路のからの入り口部に設置してあり、ジオパークとしての可視化が図れている。

５．拠点施設 （観光協会） 	大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） 岩井　実 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ推進係長）	・現在、道の駅が改修中のためジオパークのコーナーが狭かったが、改修に合わせてジオパークの見せ方を再検討できないか。 ・道の駅に設置している総合案内看板もジオパークとしてリニューアルしてもらいたい。
６．拠点施設 （自然史館） 	保科　裕 （自然学校運営委員） 大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） 岩井　実 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ推進係長） 関谷　友彦 （協議会事務局員・ 専門員） 片山　美雪 （協議会事務局員）	・日本ジオパークの位置図など全体の取り組みが分かるような掲示がほしい。 ・日本列島や地球との関わりが分かるような展示と解説がほしい。 ・気楽な気持ちでジオパークに来た人が楽しめる展示も工夫してほしい。 ・文化財（石器などの遺物：人の営み）と大地のつながりを解説する全体的なパネルが必要である。
５．ジオサイト見学 （跡倉クリッペ） 	保科　裕 （自然学校運営委員） 大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） 岩井　実 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ推進係長） 関谷　友彦 （協議会事務局員・ 専門員） 片山　美雪 （協議会事務局員）	・日・英表記など外国語対応が必要である。 ・総合案内看板、ジオサイト看板などの統一したデザインによる看板作成が必要である。
６．ジオパーク協力店 	大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） 岩井　実 （ｼﾞｵﾊﾟｰｸ推進係長）	・店舗内にはジオパーク関連のパンフレットも配置してあり、積極的な協力関係がうかがえた。 ・しゃれの効いたジオ菓子も作っており、一般の方が興味をもってくれそうである。

７．現地審査講評 	原　秀男 （下仁田町長） 吉弘　拓生 （下仁田副町長） 茂木　学 （下仁田町教育長） 大河原　順次郎 （協議会事務局長） 中村　由克 （協議会事務局次長） その他参加者名簿参照	